

離苦得樂を原理として

小 笠 原 秀 實

1

般若思想の要約であり、又提言となつてゐる應無所住而生其心について、單純にそして又圖式的に考へてみたいと思ふ。それはたゞ般若思想の要約たるばかりではなく、全佛教の眞髓に關する重要な把握のひとつである。更に進んで云へば全佛教に限られては居らず、寧ろ全人間の生存要諦であり、願求し實現しなければならぬ歸趣である。この重要事に關する教義的、傳統的指針はまことに多い。それも單なる指針ではなく、解釋の相違に依り、宗團對立の分岐點となり、派別の紛糾ともなるほど實踐上の重要事である。かゝることがらを單純に考へてみるということは難中至難事である。けれども人類生存の基本原理解である限り、論議、評論にばかり任せては置けないはずのものである。

2

重大事は極めて要部、細部に立入つて詮議し論證しなければならぬという必要もむろん考へられる。けれども逆に重大中の重大なるが故に、細事を離れ、極めて大局の見當をつけねばならぬということも一層必要である。北進の航路

をきめるのには、地上のさまざまな目標も考慮されねばならないが、大局の方針としては、空高く輝く北斗星を目標とするのが最も健全であり、そして又最も單純である。

この圖式は甚だ粗漫な略圖にすぎないが、大局としてはかの北斗星を航路の目標としたのである。北斗星とは他の何ものでもなく、全人間にゆきわたる平等な離苦得樂の實現である。つまり應無所住、而生其心という羅針盤の針を正確に、離苦得樂なる北斗星に向けたいのである。

3

初めに羅針盤としての應無所住、而生其心の大要が金剛般若波羅密經に依つて讀まれる。

「不_レ應_ニ住_ニ色_ニ生_レ心、不_レ應_ニ住_ニ聲香味觸法_ニ生_レ心、應_ニ無_レ所_レ住、而生_ニ其_レ心_ニ」(羅什譯)

「應_ニ如_レ是生_ニ清淨心_ニ而無_レ所_レ住、不_レ住_ニ色_ニ生_レ心、不_レ住_ニ聲香味觸法_ニ生_レ心、應_ニ無_レ所_レ住而生_ニ其_レ心_ニ」(菩提流支譯)

同じ内容が英譯では次のやうになつてゐる。

“Therefore, O Subhūti, a noble-Minded Badhisatva should in this wise frame an independent mind, which is to be framed as a mind not believing in anything, not believing in form, not believing in sound, smell, taste, and anything that can be touched.” (Max Müller; The Sacred Books of the East, Vol. XLIX)

「而生其心」の心が英譯では「獨立心」になつてゐる。それは心の本質に歸り、その本質を實現するのが獨立心のはずであり、やがてそれは自性清淨心を意味するであらう。又「住する」が believing in になつてゐるが、それは信賴して依り處とするの意であり、to place confidence in の義に相當してゐると見られる。

「住する」「信賴する」「依止する」は何れも感覺的な關心の對象として、又基盤として依りかゝるのである。「たよる」に足るものに「たよる」のはむろん正しいが、「たよる」に足らないものに「たよる」のは誤謬であり、迷ひであり、妄見妄想である。「住する」というのは「安住」の意味ではなく、根據、基盤のないものに誤つて信賴し、依託しているのである。この誤謬から解放されて別の根據に立つ方途に出ようとするのが、正に應無所住である。それは色聲香味觸という五感、五慾の表面的な、そして又必ず苦痛を呼び起す快樂に耽つてはならないという指針である。

住するところなくして何處から別の心が生ずるのであるか。而生其心の根據となるものは何であるか。そこには論理的な進展が見出されねばならない。論理の進展ではあるが、別に奇蹟的な飛躍でもなければ、迷宮迷途をひきまわされるところははずのものではない。あらねばならぬ人間要求の離苦得樂を實現し、萬人平等の法悦に生きて行くことの推理である。それは當然萬人共通の生命本源からひき出される。

離苦得樂へのひとつの徑路として次の論理があげられる。それは甚だ不合理な形式に依つて一層深い人間の本性なる常住悅樂境を提示しようとしている。不合理的に見える形式が何故に使用されるか。甚だ多くの岐路、迷途をひき出す恐れのある方法が金口妙諦の一説として何故に演出されるのであらうか。上掲、金剛般若波羅密經には次の一節が説

かれています。

「三千大千世界所有微塵是爲多不、須菩提言、甚多世尊、須菩提、諸微塵、如來說非微塵、是名微塵、如來說世界非世界、是名世界、須菩提、於意云何、可_レ以_二三十二相_一見_レ如來不、不也世尊、不_レ可_レ以_二三十二相_一得_レ見_レ如來、何以故、如來說三十二相即是非相、是名三十二相」(羅什譯)
 マクス・ミュラーでは次のようになってゐる。

「世尊が曰はれた、どう思うか須菩提よ、正覺せる如來は三十二相に依つて見られるか。須菩提が答へた、否、世尊よ、正覺せる如來は三十二相に依つては見られません。それは何故か、三十二相として如來に依つて説かれたものは、如來に依つて無相として説かれたからであります。だからそれらが三十二相と呼ばれるのであります。」(同所)
 同じ論理が簡單に次のやうに説かれています。

「若見_二諸相非相_一、則見_二如來_一」(羅什)

“Hence the Tathāgata is to be seen (known) from no-signs as signs.” (Ibid.)

これら一連の論理は、「色即空、空即色」の公式に相當する。色は因縁所生法なるが故に實體なく、空又幻華である。けれども又、幻華の生れる必然の法則を知れば、幻華の存在する理由が了解されるはずである。連續せる一連の因果關係を切り離し、個々の斷片を見ることに依つて必然法を見失ひ、偶然ひき起される錯誤に悩まされることとなる。この必然法を全面的に精密に了解するならば、空はやがて必然的に色たるのであり、非相もまた、そのまゝで三十二相となる。

微塵から非微塵、非微塵から微塵に進み行く論理もそれらと同じである。微塵、非微塵の連續もそれは言葉の反復ではなく、一層深い本質的なるもの、常住的なるもの、完成的なるもの、淨樂そのものへの接近過程を指示しているの

ある。

7

同じやうな論理方式が他の形、他の主題について繰りかへされている。

「若_レ以_レ色見_レ我、以_レ音聲_ニ求_レ我、是人行_ニ邪道_ニ、不_レ能_レ見_ニ如來_ニ、彼如來妙體、即法身諸佛、法體不_レ可_レ見、彼識不_レ能_レ知、」(羅什)

英譯では次のようになっている。

「色相に依つて我を見たる人々、音聲に依つて我を聞きたる人々、誤れる努力に従へる人々は、我を見ないであらう。佛陀は法から見られ(知られ)るのである。なぜならば世尊(諸佛)は法身を持ち給うが故に。そして法性は了解されることもできなければ、又了解されるようになつていないのである。」

これらの推理方式の目的のひとつは、感覺的認識の奥にある理性的認識が求められねばならぬということになるであらう。そしてそれは又別な實質的なるものの認識並びに具象的實現の道をも含まれているはずである。

8

般若空の推理方式は同じ所をめぐつていようにもみられるが、その間に漸次内面的實質なる淨悅に近づいて行かうとする進展性をみせている。

「須菩提、若有_レ人言、如來若去若來若住若坐若臥、是人不_レ解_ニ我所說義_ニ、何以故、如來者無_レ所_ニ至去_ニ、無_レ所_ニ從來_ニ故、名_ニ如來_ニ。」(菩提流支)

離苦得樂を原理として

四五

「……何故ならば如來なる言葉はいつこへも行かず、いつこからも來らざるものを意味するのであるから。それ故に彼は神聖にして圓滿に正覺せる如來（眞實に來る）と呼ばれるのである。」（英譯）

こゝでは「神聖にして圓滿に正覺せる」（holly and fully enlightened）になつていて、神聖、圓滿、正覺などの内容が與へられている。この前には「法體不可見、彼識不能知」になつていたり、又「法性は了解されることもできなければ、又了解されるようになつていない」というように説かれていたのである。それらはみな、不可見、不能知又は不可知のものとして突き放されていたのである。これに較べるならば、神聖といふ、圓滿、正覺というのは、とにかくいくらか如來の内性を表示しているものと解釋されるのである。次の一項は正覺が斷滅相（annihilation）であつてはならないといふことの擁立である。

「菩薩發阿耨多羅三藐三菩提心者、不説諸法斷滅相。」（羅什）

同じ内容が次のようになつてゐる。

「須菩提よ、菩提道に入つた人々に依つて、一切法の破滅、斷滅が宣言されるといふことを、如何なる人も決して汝に告げてはならない。」（英譯）

空であり、無所住ではあるが、斷滅の相ではないことの表示である。これらに一貫せる推理原則は反價值性のものが否定せられ、價值性そのものが肯定されねばならぬという方式に歸着される。それは又五慾の快樂、苦痛を伴う快樂、たよることのできない快樂を遠離して、常住の樂、苦痛を伴はざる樂、遍法界に平等公布される樂が求められねばならないといふ法則に集結される。

すべて我々人間の推理方式は實在を把握了解しようということにある。この目的は同様であるが方法並びに對象に關して、やゝ別の方向が選ばれる。

實在把握を要求する根據は、人間としては離苦得樂の目的を達成しなければならぬ點にある。すべて錯誤は苦痛の根源となり、正しき理解が眞の悅樂の基本となるからである。

推理方式は一般に演繹、歸納の二法に總括されている。演繹は普遍的なものから特殊現象を推定し把握するのであり、歸納は個々の特殊事實から一般的普遍なるものを見出さうとするのである。

實在とは人間にとつて依止するに足る確實性のものである。この確實者を求めるために、演繹、歸納の二方法がたえず使用される。依止するに足らないことが見出されると同時に、それは眞理性又確實性を失ひ、別に新しく依止するに足る確實な基盤が要求される。このことの發見のために、歸納と演繹との二法が絶えず、さまざまの正確さを以つて運用される。般若の空理、應無所住而生其心の定立も、それが眞理である限り、歸納、演繹の原則を破るものではない。辯證法と呼ばれるものも、それが正確であり、誤謬と詭辯とを孕んでいない限り、この原則に従つてはさうでなければ詭辯に墮するのであり、一語二重使用の弊と論旨變更の曖昧を冒すのである。それは實踐を誤らすこととなり、全人間の生活に不安と災禍と呼び出す魔障となる。

10

「有は無なり」というヘーゲルの辯證法の基本的出發は、有の範圍即ち外延を極めて廣く擴げて行くならば、どういふ性質、内容もなくなり、無と同じものとなるという論證である。いちおう納得的であるようにも思はれる。けれども立入つてよくこの推理性を究明するならば、外延として有の範圍を擴大するという立場から出發しながら、その行進の

方向を突然變更して、内容を眺めるといふ別の立場になつてゐる。正當な理由なく、曖昧の間に立場を變へてゐるのである。内外立場を變へるといふことになれば、結果は別のものに見られるのは當然である。有の外延を擴める方向にある限り、この立場の眞實を守らねばならない。こゝに冒してはならない認識の基本法が壞されている。かゝる基本的な法則を破るといふことになれば、どういふ逆説も産み出されるはずである。論旨變更、一語二重使用の過失が遂行されてゐるのである。

辯證法の根源は對話のうゑに於て、互に意味を詮議し合ひ、正確な認識、確實性ある客觀的知識を樹立しようといふことにあつた。對話のとりやりに於て守られてゐるものは、正確なる歸納と演繹の推理であらねばならぬ。それを冒すならば、その對話は錯誤となり、従つてその方法も正しいものとして許すことはできない。定立、反定立が簡單に一致するはずはないのであり、そのために矛盾と呼ばれ、兩立することを許されない結果となる。

11

地球は動きつゞけゐるのに動くとは見られないではないか。又太陽は動いてゐないのに動くと見ねばならぬのではないか。動かぬものが動き、動いてゐるものが動かないとすると、動即不動、不動即動といふ逆説が成立するのではないか。

この間の動と不動については、認識としての段階的な相違がある。大地は動いてゐないが、もつと廣汎にわたる諸天體との關係を検査するならば、どうしても動いてゐるとしなければならぬ。又太陽は東の山から出て西の山に没するが、これも巨視的觀點よりするならば動いてゐないとしなければならぬ。かくて天動説がコペルニクスの轉回の結果、地動説に眞理を譲つたのである。

これには感覺的事實と理性的推論との交代が認められたのである。そこにはどういふ奇蹟もなく、我々の視覚器官の持つている習性と客體的事實そのものとの間に微妙な必然關係が繋がつてゐるのに、そのことを閉却しているという過失に歸する。視覚機構の必然として、あるときには動くものを動かないと見たり、又動かないものを動くように見る生理的組織機構が備つてゐるのである。この機構の必然を追求するならば、別に奇蹟のあらうはずはない。要は認識の嚴密な研究に待たねばならぬということに歸着する。

12

スピノーザの知識論を要約するならば、感覺に相當するものと、理性並びに直觀知と呼ばれる、三つの段階に歸着する。感覺は事物の必然關係を離れ、切れ切れの斷片として把握するが故に、知的明瞭のものとはならず、曖昧朦朧たる妄想であつて煩惱苦痛の根源となる。恰もそれは遍計所執性に相當すると見られる。繩を蛇と見るたぐいである。理性は事物の必然關係を正確に因果として追求し把握する。これは煩惱苦を脱する冷嚴なる方途であり、依他起性にも類推され、繩を繩と見るのである。直觀知はさまざまの條件をつけねばならぬかも知れないが、大體圓成實性に相當し、繩の體即ち麻と見るということにも譬へられるであらう。東西著しく時處を異にし、傳統、教系など全く別であるから、精密に合致するとはいわれないであらう。けれども一定の類似性を見出すことに依つて相互の理解を補足しあうという便益は得られる。加ふるに同一人間性を共通にして居り、知識機能に於て全く質を別にしてゐるとは云われないのである。蛇と繩と麻との譬喩さへも相互に適用され得る餘地を持つてゐる。

たゞ最後の段階に相當する麻の譬喩は極めて根本的なものを示してはいるが、素材的なものとなり、又抽象的なものとなつて、生命の具象的な本義に相當するであらう淨悅圓成の實性を指標して見なければならぬ。譬喩一分

として了解しなければならぬと同時に、月を指す指に膠着してはならないはずである。

13

色即是空、空即是色も形式のうえより云へば論理としては循環論法であり、一所に始終して同じところを幾度もめぐつていなければならぬ推理方式のやうに見える。古來縛馬答と呼ばれていたものがある。馬を縛つた者は誰れか、馬の主人である、馬の主人とは誰れか、馬を縛つた者である、かくの如く同じことを幾度くり返へしても結局誰れが何時何をしたかがはつきりするはずはない。空即是色の色が幾度も元へもどつて色即是空になり、それが又空即是色になるはずである。このことはこの表現の形式よりすれば幾度もくり返へし得られるであらう。さうなればこの表現は表現として思想的に無力である。

應無所住、而生其心にしても、所依の確實性なしに、心の生ずるはずないし、又たとへ生ずるにしても所依なく、根據なき所産とするならば空華、幻想と選ぶところがない。

「如星翳燈幻、露泡夢電雲」

これは根據のない有爲法について説かれているものであるが、無所住として所依なしとするならば、無爲法もまた如露亦如電のはかなさに歸着してしまふであらう。たゞ無所住の住なるものが、關心的執着性、五慾妄執性の住し方であるが故に、精神、生命の眞の價值性から云つて露泡夢電雲のはかなさに追い込まれてしまふのである。これに反し、至上價值性であり、究竟淨樂性であるものを根據として而生其心を實現するならば、それは全く有爲法を脱して無爲法の眞理に安住するはずのものである。正に價値の轉換であり、轉迷開悟であり、實に離苦得樂の究竟地である。「如來者無所至去、無所從來、故名如來」ということも、關心的感覺固執の去來を離脱し、至上價値、究竟淨樂の眞實

から來至するが故に如來と名づけることができるのである。無所從來故の「故」は價值轉換の契機を表示する根據であり、又必然の理由を具備しているのである。表面的なる去來、感覺的なる動靜を本質的なるもの、淨樂的な心の本性に還すことに依り、一段の深さ又内包的な純正性から呼んで如來とするのである。この積極的淨樂面から「不説諸法斷滅相」が認められるのである。

尙「無所從來」の「來」と、「如來」の「來」とは一語二重使用のやうであるが、この間の機微にわたる結合關係を、詩的表現又感興的語律の妙味に依つて表示しようとする意圖の現れであると見られる一面を持つ。

14

すべて人間の思想は離苦得樂の要求から始まる。感覺は外部から受けることが主要任務になつてゐるが、苦樂は生命の最も深い根柢から自發的に湧きあがるのであり、それが作爲行動をきめるばかりではなく、悅樂の至醇に依つて生命價値の完成を實現する。知能的な判別採擇のはたらきは、離苦得樂、拔苦與樂のための必要に刺戟されて動くのである。知らんがために知るといふ知性の獨立要求として眞理探究の道が認められることもあるが、その根柢に遡れば疑惑、又は矛盾などよりひき起される不快、苦痛を解決したいためであると考へられる。

「自然を克服せんがためには、まづ自然に従へ」といふペーコンの有名な提言も、必要な方法として自然を學ぶのであるが、根本の動機となり、更に究竟の目的となるのは離苦得樂のためであり、又利用厚生の益を求めたいためである。たと目前に迷される近視眼的な功利得樂が批判の俎上にあげられ、整備され、純化、深化されねばならぬのである。

15

高級化され、純化されたる離苦得樂の淨悅は、排他的獨善を自ら否定することとなる。それは淨悅そのものの内性から當然ひき出される高度社會協同性の本質をなす。願共諸衆生への祈念は社會的全般協同和合への基礎條件である。

離苦得樂の樂は五慾關心の樂ではなく、我利我執我慾を離脱した淨樂、淨悅たらねばならない。そしてそれは絶えず磨きあげられ、至心に念々淨化の行道を進まねばならぬ。それはたゞ個人、個人の淨化ばかりではなく、全法界を同朋同信の淨行團として、平等に法悅と淨樂を高級化して行かねばならぬはずである。社會協同集團として切るに切られぬ結合關係になつて伸びあがらねばならぬ状態に置かれているので、逃避的個人解脱の成就するはずはない。全世界全人類が一團として繋がつている限り、無縁の人々があるはずはなく、遊離せる單獨の個體もあり得ない。我等與衆生の誓願となり、平等施一切の相互協同扶助が世間出世間の二道に於て緊密に擁立され、日々伸長するであらう原理と實踐とに精進しなければならない。

世間と出世間とは同一人格が同時に實現しなければならぬものであるから、この二つは合理的に一諦化され、精密な組織に於て行進しなければならない。出世間はあらねばならぬ淨悅の純化であり、すべての人々が漏れなく實現して人間たるものの眞髓を磨きあげ、法悅の歡喜光中に自らを享受する方途であり、又世間道はすべての人々にこのことを達成させるに足る適當な條件を相互協同に依つて充足さす任務を負ふ。能力に應じて盡し得られるものを盡し、分に從つて皆令滿足の充實を企劃し合はねばならぬ。唯物、唯心各々の弱處に陥ることなく、各々の長所を育て、偏頗の餘弊を離れねばならない。

希臘に於ても哲學的思辨の動機となつたものは疑ひであつたと傳説されている。疑ひは單純に理解できないもの、矛

盾撞的に見られるもの、相容れないもの、去就に迷はねばならないものに遭遇する場合に生れる。それらの内感としては、何かの形に於て苦痛感が伴つてゐるはずである。知性にとつて矛盾撞着感を與へるものは、内感に於ては必ず苦痛である。疑ひの動機となり、解決への行進となる動力は苦痛であり、そしてこの苦痛を離脱しなければならぬという衝撃力である。

このことよりして人間一般の思想的行進の基本動力は離苦得樂と云ふことであり、又拔苦與樂と云ふことに歸着する。かくて離苦得樂の原理は單に佛教々學の發動力であつたばかりではなく、全人類一般の思想的努力の根源である。この根本義よりするならば、世間道、出世間道の二途にわたつて別の論理のあらうはずはなく、又かけ離れた實踐のあらうはずもない。現在往々この二つのものが各の途を離れ離れに行進してゐるようになつてゐるのは、人間そのものの正しい生き方として許され得べきものではない。人格の成立は靈肉兩面の正しい統一を意味する。肉だけの人、靈だけの人のないように、世間道だけの人、出世間道だけの人のあらうはずはない。かりに職域的差別があるとすれば、社會協同面に於ける任務の分擔であつて、人間性本質の分離ではない。それらの究竟目的は人類全般にわたる個々の人々の完全なる離苦得樂であり、純化せる淨悅歡喜の實現であらねばならない。數千年にわたる思想史の展開も畢竟このことに歸するはずである。人性に附隨する痴と慢とに障礙されて、低迷朦朧の現代史を産み出して居り、大戦に重ぬるに大戦を以つてする痴慢に拍車しようとする現實のやうに眺められる。願共諸衆生の悲願はむなしく世間俗慾道の高率利潤追求の狂態のために活力を奪はれ盡してゐるかの感を懷かす。法界にわたる離苦得樂のために、應無所住の清淨心を基底とし、而生其心に依る淨邦の建立を全地上に、普く平等に實現しなければならぬはずである。

起信論は造論の理由因縁を説くにあたつて八種をあげているが、最初は因縁總相と呼ばれ、離苦得樂の目標を掲げている。

「所謂爲_レ令_下衆生離_二一切苦_一、得_中究竟樂_上、非_レ求_二世間名利恭敬_一故」

といふ。次の七種は悉くこれに攝收されるのであるから、結局造論の目的は離苦得樂にあることとなる。それはたと單にこの論の目的たるばかりではなく、岐路に入らざる佛教々學は悉くこのことに包攝されるべきである。更に一步を進めるならば、それは佛教々學に限らず、全世界に於けるすべての思想にわたり、邪義、邪想の岐路に耽らなかつたすべての思辨は、悉く全法界衆生の平等にして崇高なる得樂の追求であつたはずである。偏狹國家主義、世界克服主義、排他獨尊優越主義というものはすべて平等な離苦得樂への大道を離れたのである。戰禍のために續發し、殘害到るところに悲痛を呼び出したのである。禍根悉く貪瞋痴慢の反知性に依つて誘導されたのである。無所住の淨心、淨樂から發動せず、貪慾の關心的固執を動機として強行したからである。造論八種の因縁の第五に「遠離痴慢」をあげているのは知性としての正見を呼びさましているのである。

18

人間生存の形態として世間と出世間、眞諦と俗諦とに區別されることは、人間が靈と肉との存在であり、有るものと有りたきものとの對立に繋かれる限り、當然の要求として認められねばならない。けれども靈と肉とが一身のうちに結合し合っている限り、靈肉をきつぱり切り離してしまふわけにはならない。靈肉が別のものであり而もそれが切り離されないとするならば、その間に妥當な組織關係、系統的統一關係を持たねばならぬはずである。この關係はまた當然、世間と出世間、眞諦と俗諦との間にも嚴密な系統關係として組織されねばならない。でなければ出世教團は根のないユ

トーピアンの社會存在に終らざるを得ない。「來れ、志あるものは我が教團に來つて行乞と證道修行にいそしめ」ということが、佛教ばかりではなく、恐らくすべての理想的思想團體の成立過程であつた。十九世紀中葉にあつて世界の各所に生れ出した新社會の創設はかゝる呼びかけがもとであつた。それらは證道修行團ではなく、全く生産勞務の協同であつた。暫くは新しい曙光を見せたのではあるが、廿世紀に及んで概ね衰頽の行路を歩むことになつた。空想主義的建設と呼ばれる理由である。

佛教々團、その他宗教々團の多くは、それほどはかないものではなかつたが、然し靈肉の組織的統一に關し、又眞俗二諦の合理的結合に關し完全そのものであつたとはいはれない。正しい教理を持ちながら時代の世俗的攻勢のために、世界到るところ動搖と退却の傾向を見せているとすることができらう。それは正しい教理の實生活に對する適應的な方向がはつきり規定されていないからである。

19

嚴密に云へば應無所住、而生其心というやうな純化せる清淨心を基礎にして全法界、全世間道を悉く淨化させねばならぬ任務を帯んでいるわけである。それが逆に俗情、俗世相の攻勢と侵略とに堪えかねて動搖の危険に面接しなければならぬ不運に置かれている。

而生其心の清淨解脫心から現實に淨佛土、淨人間土を創設して行かねばならぬ任を持ちながら、あまりにも狭いユトーピアンの別天地に膠着するということに依つて、法界機構の客觀的行進法則を閉却することになつてゐるのではないか。而生其心が聲聞緣覺の二乗心ではなく、化他の大願に住するであらう菩薩道の清規であるとすれば、世界的に論議の對象となつてゐる全人類生活機構の根本法則をも探り、それらの大勢を學ぶと共に、正しい方向を與へねばなら

ない。それは清淨悦樂の而生其心を理論と實踐とに於て廣く宣布し、豫想されがちになつてゐる將來の大戦亂を、物質の上からばかりではなく而生其心のうえからも抑止しなければならぬ。かゝる森嚴な任務を果すことが人天の大使命として課せられてゐるのである。